

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十六卷第九号（通巻第一八九号）

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第189号

1. 2010

謹賀新年

摩耶飛雪

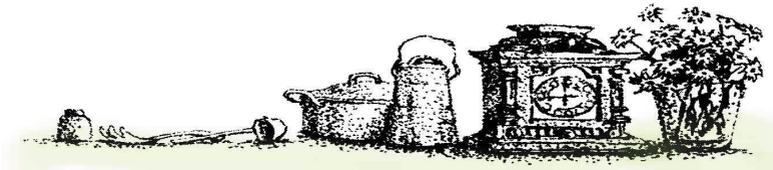
品川 鈴子

雪積みし礎を貫主に腕ゆだね

初詣貫主に喜寿の手を曳かる

ともすれば韋駄天歩き春着にて

あらたまの補聴器そし誇り混じへざれ



初句座の補聴器誇り伝はらず

嶺^ねから嶺^ねへハンドル捌き摩耶飛雪

初能の翁広袖翻えし

弥^イ・應^{オウ}と内陣響く能初め

藁葺き邸外厠には稽の注連

邸畑はみで大根まづ抜かる



玉

鈴

吟

大阪 小阪律子

河蜻蛉尾に金属の艶もちて
鯛雲金子みすずの昼の海
瑞垣の点字の碑にも木の実落つ
変わるもの変わらぬものあり鳥瓜
神の旅傘も合羽も携えて

東京 後藤とみ子

紫の花を伝ひて秋の蝶
隠元豆茹ですぎるのは祖母譲り
娘らの振り袖姿菊日和
台風過ぐ晴れとくもりの目まぐるし
ベランダに太った雀天高し

大阪 小林 玲子

釜ほどの鮪の頭売れ残る
コスモスの迷路を抜けて若やぎぬ
身に入みて病院ホールの二重奏
椋鳥のむれ湯畑に近寄らず
聞きし名をすぐに忘れてお花畑

香川 近藤 倫子

そぞろ寒チラシに指を切られけり
孫の名を順に諳んじ敬老日
付き添ひの方が晴れやか文化祭
進路など決めぬ性分野分過ぐ
膝がしら見せてお小言吾亦紅

兵庫 坂口三保子

膝掛毛布俳人協会より賜る
月光の中散髪を終へ帰る
名園の菰巻印半纏で
鱗雲見とれ続けてよるめけり
木犀の花も終れり庭師入れ

兵庫 佐方 敏明

長き夜に動詞活用繰り返す
信号待ち前の車は芒積み
掘りたての諸蒸し提げて来る句友
新米のご飯とハムの目玉焼
だまし絵を斜めから見る神無月

東京 佐田 昭子

若沖の動植綏絵 初曆
三日はや江戸千代紙の店に寄り
古稀の思ひ密かに込めし年賀状
やはらかに生きてゆきたし手毬つく
初鷄のこゑに目覚める父の郷

兵庫 塩出 眞一

渋滞の車窓開くれば虫時雨
燕去るブラジル移民像かすめ
煎餅を買へば牡鹿に尻突かる
よく見れば鹿ことごとく長睫毛
蝗飛ぶ出張のバス降りたれば

香川 島内 美佳

使はざる脳を使ひて秋暑し
気心の知れた仲なり秋桜
零余子飯叱咤激励受けに行く
オートバイ跨がりて行く秋遍路
丸き背気にせぬ農夫彼岸花

大阪 島 純子

いのこずち先達につく生駒山
秋暑し下山爪先靴が咬む
一夜明け稲田にくつきり風の道
野分まつ心得しかと事はこぼ
秋の日があふる大洋ガイドさる

大阪 島本 知子

開会は三十分後残る月
白線がきりつと引かれ運動会
運動会演技の吾子はレンズ越し
好きな子と仲良くゴール運動会
運動会みんなメダルをもらいけり

愛媛 鈴木 てるみ

子規の伊予映画となりて柿撓わ
秋風に並べし小布裏返る
芒の穂一本どりで刺繍とす
若者が麻縄叩き神輿組む
怨みなお釣瓶落しに鉢合せ

大阪 鈴木 浩子

校門に教師が迎ふ夜学生
母の背に眠る幼の祭足袋
山車を観る犬の法被は手拭製
竹垣に並ぶ貴婦人葉鶏頭
秋うらら御伽列車の込み合へり

香川 陶山 泰子

一人ではできない遊び蚊帳吊草
枕木の間に三つ猫じゃらし
ダンボールの家でままごと赤とんぼ
傘杖に父も繰り出す秋祭
夜長妻ロシア小説第二章

薬草歳時記

(二八八) ユズ(柚子)

牛尾 曜子

古家や累々として柚子黄なり

子規

ユズの名は柚酸(ゆず)から変化化したと思われる。中国原産、揚子江上流の雲南、チベットのものであり、十四世紀初めごろ渡来したらしい。ユズの語源は「柚 yoo」であるが、現代中国語では、この言葉は「文旦」を指している。ユズの消費、生産ともに日本が最大で、柑橘類の中では耐寒性が強く、イソウカ病、カイヨオ病への耐久があるので、ほとんど消毒の必要がなく、無農薬栽培が比較的簡単に出来る事も特徴のひとつです。収穫時にその実を全て収穫しないカキノキの「木守柿」の風習と同じく、ユズにも「木守柚」という風習のある地方もある。その成長の遅いことから「桃栗三年柿八年、柚子の大バカ十六年」等と呼ばれることがある。この為、最近の栽培は、カラタチに接木した「接木ユズ」になり三年程で実が出来るようになっていた。種子から出来た「実生ユズ」とは、ほとんど成分に差がない。ユズの花言葉は「健康美」と言われる程、美容、健康には抜群の効能がある。ユズには種が多いが、その種を覆っているヌルヌルした部分は

ペクチンで、天然の多糖類、ゲル化作用を持つ食物繊維です。ペクチンには血行促進作用があり、肌の毛細血管の働きが活発になって、シワ、シミ、ソバカス等に良いといわれています。果実ごと压榨して、遠心分離機にかけ、精油と果汁に分けて多彩に応用されている。果皮ごと薄く輪切りにして、砂糖や蜂蜜に漬け込む。韓国ではマーマレード状に煮込んだものを湯、又は水で薄めた「柚子茶」が伝統茶の一つになっている。京都北区の水尾には、清和天皇の御陵があり、柚子の里として知られている。水尾帝とも称された天皇に中国、朝鮮からの公使や留学生がユズを献上したとも考えられる。

成分としては果実にクエン酸、リンゴ酸、酒石酸、果皮にはゲルマクリン、ヘスペリジン、ビタミンC、カロテン等。ユズは芳香性健胃薬、発汗薬、浴湯料に利用される。皮膚表面の血管を刺激して血液循環を促進し、冷え症、神経痛、腰痛、打撲、捻挫にも効果がある。冬至のユズ湯はひび、あかぎれを治療し、風邪を予防すると言われる。ユズを多くさん、食して、浴して、健康でしなやかに長生きしたいですね。

参考文献 『ユズの香り』 沢村正義著フレグランスジャーナル社

『フリー百科事典になる野の花・庭の花』

指田豊著 日本放送出版協会

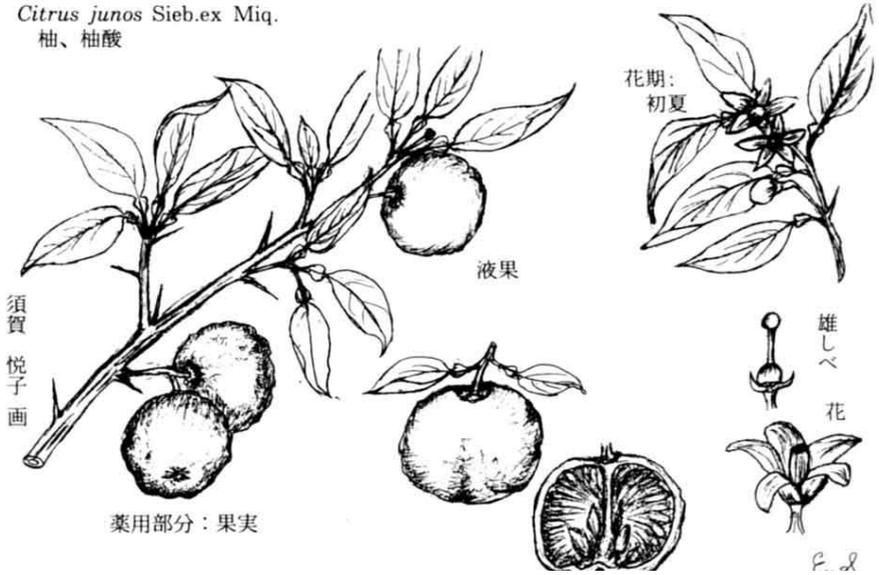
『いけばな植物事典』 瀬川弥太郎著 小原流出版事業部

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

ユズ (ユノス) [ミカン属] (みかん科)

Citrus junos Sieb.ex Miq.

柚、柚酸



湯に浮いて臍を出す柚子出さぬ柚子

* 細野 恵久

(* ぐろっけ)

歪なる柚子と浮きたり爺の顔

* 福田かよ子

鬼柚子をもらひそこねし手ぶらかな

川崎 展宏

柚子の香や遠目に黒き母の髪

野澤 節子

柚子貰ふ話に風のつのりけり

藤田 湘子

地に落す音の目出たき柚の実かな

飯田 龍太

柚子買ひしのみ二人子を連れたれど

石田 波郷

少数に深く教へて柚の軒

中村草田男

円きものいろいろ柚子もその一つ

高野 素十

柚子一つ供へつ寒し像の前

高濱 虚子

鈴の奏

品川鈴子選

劍豪の如き間合の寒鴉 兵庫 太田 實

人日の駅舎に確と盲導犬

べこ追うて泣きしあの日のボタン雪

吊るされし猪の毛並のおそろしき

丁寧にとる出し汁やこぼれ萩 兵庫 櫻木 道代

吾が家系酔漢おほし菊脛

朝寒しバター香らすフライパン

古墨磨るぎんねず色の後の月

病状の真実言へず夜の長し 兵庫 中村 碧泉

榧の実が仏足石に降りまろび

鍬の柄で計る畝幅大根蒔く

秋灯に字画確かむ虫めがね

捕虫網振る少年の重装備 大阪 井上あき子

沼の碧搔き分けひらひらと小亀

三人四脚頑張れ頑張れ天高し

鐘楼の階に憩いぬ萩の風

門長屋舞台にしたる浦祭 兵庫 大西 和子

野分晴絵島沖行く高速艇

秋うらら浦に一軒小さき湯屋

秋澄めりやまことばの祝詞冴え

肉まん売る高架の下も月明り 兵庫 磯田せい子

ジュラルミンのバケツに溢れ秋ぐら

千草の実とつぷり暮れる遊び癖

箸茶碗すすぎそそくさ萩の句座 香川

きちきちは私の三歩ひとつ飛び 石川 裕美

足下に猫やっけてきて月の客

客来れどもう一粒と葡萄食ぶ

この穴はハズレかやとて穴惑ひ 兵庫 土井 蛉夏

初孫の花火持つ手の固まりて

月下美人咲くのを忘れ早寝する

鯛雲雨具が増して老の旅

もう会えぬ友を思いし良夜かな

天高し湾の向ひの二上山 兵庫 改正 節夫

蟋蟀の色音さまざま盃の数

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 中尾 廣美 //

*選句は全て 品川鈴子

劍豪の如き間合の寒鴉

太田 實

劍道などで間合いとは相手との適当な距離や時機のこと、ころあいはかるに秀でた達人は劍豪とも呼ばれる。寒の極まる頃、人里に近づく鳥で、もつとも目に付き易いのは鴉。雀等より図体がでかくてずうずうしく、黒くろすくめの寂び姿で何となく劍士の風情。閑かに睨みあう二羽の構えは、一分の隙も見せぬ厳しさ。

古墨磨るぎんねず色の後の月

櫻木 道代

百年単位の年代を経て、よくかれた墨は、手に取ると非常に軽く、静かに磨り下ろせば淡い墨の色が、えも言われぬ味わいを示す。鮮やかな墨痕よりも遙かに文人好み。名月の八月十五夜と較べ、一カ月遅れの旧曆九月十三夜の情緒の違いにも通じる美意識。

筆を擱いて仰ぐ名残の月は銀鼠色、染色では、銀色を帯びた鼠色の渋い気品を称える。

鍬の柄で計る畝幅大根蒔く

中村 碧泉

大根は春か秋の彼岸に蒔くが、畝巾ひろく均して種をやや密加減に蒔く。双葉から本葉を伸ばす頃には、間引菜、貝割菜として幼く柔らかい内に抜いて食べるので、大根の育つ適当な間隔となる。農仕事の物差は、畝上げ鍬の柄を逆手に持てば、すぐに事足りる。経験豊かな者の知恵。

鐘楼の階に憩いぬ萩の風

井上あき子

高い鐘楼に上つてきてほつとなさつたことでしょう。見下ろせばはるかに街、あるいは村が見渡せる階きざはしに坐つておられる様子が目に浮かびます。その時、火照る頬に心地よい風が吹きつける。折りしも萩の季節です。

門長屋舞台にしたる浦祭

大西 和子

今日は入り江の町の祭の日。在の人たちや帰郷してきた

子ども達が燥ぎながら次々と集まってきているようです。江戸時代、大名屋敷の周りを長屋で囲み一箇所を門として開けておいたのが長屋門。そこを舞台にして、さて、今日の祝いの出し物な何なのでしょう。わくわくします。

千草の実とつぷり暮れる遊び癖 磯田せい子

秋の日は早く暮れます。まだ四時過ぎでも暮れ始めます。その中で夢中になって遊んでいる子どもたち。千草とは名のある草の花も名もない野草の花もこめて、秋の草をいゝます。その実が赤く暮れ残っているような宵の口。子ども等は気にもせず遊びほうけているのでしょう。昔の夕ぐれを思い出す映画のようです。

この穴はハズレかやとて穴惑ひ 石川 裕美

季節が来ても穴に入らないでよろくと這っている蛇を見つけての作者の思い。どうしよう。ハズレかも。良いこととはないかもしれない。やめようかと、その蛇に代わって思いを馳せている面白さ。想像力の自由さに引かれます。それは又、作者の決断をしなければならぬ時の迷いを示

唆しているのかも。

月下美人咲くのを忘れ早寝する 土井 蛉夏

夏から秋にかけて咲く花、月下美人。一夜かぎりの花で、暗くなる頃から開き始め、深夜にはしおれ始めます。きつとその蕾の頃から水をやり世話をしこられたのでしょう。さあ、今夜あたりと大輪の花が咲くのを待ち望んでいらしただろうに、ふと忘れて早寝してしまったという句。さぞや残念でいらしたことでしょう。

思ひ出す子供の墓に鉦叩 改正 節夫

お子様を亡くされたのでしょうか。墓参りをした夕暮に、いつまでも鉦を叩くように鳴く虫が供養をしてくれているように感じられたのかも。草むらの虫の音に逝ってしまう子どもの所作を思い出されているようです。どうしようもない悲しさや悔しさが思われます。(以下略)